

小松島の 民話・伝説

恵まれた自然の中で、古くから豊かな文化を育んできた本市には、
小松島独特のユニークな民話や伝説が残され、
今も人々によって大切に語り継がれている。

Unique folktales and legends, peculiar to Komatsushima, have been passed
down from generation to generation in this city, where affluent culture has been
advanced in abundant nature for a long time. Some of the tales are: "Kincho
Daiko," where a raccoon dog was supposed to be a heroic character; and
"Kobodaishi no tsue no mizu," where a famous monk did wonders.



弘法大師の杖の水

ある夏の日、貧しい旅の僧侶が近くの農家で水を飲ませてほしいと頼んだが、農家の主人は「この辺りの井戸水は塩がさして飲めない」と断った。僧侶が立ち去った後、この主人が水を飲もうとすると、今までおいしかった水が塩辛くなっており、それからこの地の水は飲めなくなってしまう。僧侶は弘法大師だった。数年後、再びこの地を訪れた弘法大師は、人々が困っているのをあわれに思い、持っていた杖で地面を突くと真水が噴水のようにあふれ出た。それから後は、水に困ることもなく、人々は弘法大師に深く感謝するとともに、この井戸を大切に使った。



お玉大明神

台風が来るたびに堤防が決壊して水害に苦しめられていた人々は、ある年「ここに人柱を立てる他はない」と決断し、翌朝一番にこの場所を通った者を人柱にすることに朝を待った。次の朝、最初に現れたのは美人でやさしいと評判のお玉さんで、事情を話すと「大勢の人が救われるのなら」と自ら水底深く沈んで

で行った。人々は涙を流し、念仏をとねえながらこれを見送った。以来、どんなに強い台風が来ても水害に見舞われることはなく、お玉さんの加護に感謝し「お玉大明神」を建てて霊を祀った。



おかめ磯物語

かつて、「おかめ磯」という所には千軒の家があり、みな平和に暮らしていた。この氏神様には古くから、鳥居に鷲がとまり、狛犬の目が赤くなるとこの島は海に沈むという言い伝えがあったが、ある日、島の若者達は、毎朝この氏神様にお参りに来るおばあさんを脅かしてやろうと、狛犬の目を赤く塗り、鷲の羽根を鳥居に置いた。これを見たおばあさんは恐怖に身を振るわせ、すぐに家に帰ると、島の人々に逃げるように勧めたが、だれもとおりあう者はなく、家族とともに家財を船に積み込んで芝山へと逃げた。すると、島はにわか黒い雲



に覆われ、山のような大津波が押し寄せて一夜のうちに海底に沈んでしまったという。

田野久

今から二〇〇年ほど昔、田野村に住む久兵衛、愛称「たのきゅう」という旅役者が、讃岐の巡業中に父の重病を知らされ、真夜中の大坂峠を急いでいた。突然「おまえは誰じゃ」と呼び止められたが、急いでいたので「たのきゅう」と叫んで通り過ぎようとする、そこにはうわばみ(大蛇)がとぐるを巻いていた。「たのきゅう」を「狸」と間違えたうわばみが「狸なら俺と化けくらべをしよう」というので、久兵衛は素早く得意の女形に変装すると、驚いたうわばみはあっさり負けを認め、「おまえは世の中で一番怖いものは何だ」と問いかけてきた。久兵衛が

「お金だ」と答えると、うわばみは「俺はたばこのやにと柿のしぶをなめると死んでしまう。このことは誰にもいうな」と洞窟の中へ入って行った。無事に麓へたどり着いた久兵衛は、村人達にこのことを話し、村人達がたばこのヤニと柿のしぶを集めて洞窟の入口に積み上げたものだから、怒り狂ったうわばみは、息も絶え絶えに久兵衛の家までやってきて大判、小判をざくざく降らせて立ち去った。間

もなく父の病気も治り、久兵衛は村一番のお金持ちになったとき。

金長たぬき

江戸時代の末頃、日開野に金長という狸が住んでいた。ある日、村の子供たちにいじめられていた金長は、染物屋の主人・茂右衛門に助けられ、恩返しのため屋敷に移り住んで守り神となり、店は大いに繁盛した。その後、金長は狸界の大物・六右衛門のもとに弟子入りしたが、六右衛門は人をだます悪い狸で、金長の才覚に目をつけ養子縁組を迫るのだった。金長は染物屋との約束があるからと断り、怒った六右衛門は自分を引き連れて闘討ちする。傷ついて日開野に帰った金長は家来の仇討ちを誓い、県南の狸たちに呼びかけて六右衛門討伐の兵を挙げた。こうして勝浦川を挟んで総勢数百匹の狸の戦いが繰り広げられた。これが世にいう「阿波狸合戦」である。激しい攻防の末に最後は金長と六右衛門の一騎打ちとなり、金長が勝利したものの、三日後には染物屋の主人に看取られて死んでしまった。彼の生きざまに感激した主人は金長を「正一位金長大明神」として末永く祀ったという。

